

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo. 34 (2016年2月号)◆

2016年新たな年を迎え、本年は、20世紀メディア研究所にとりまして、研究会第100回例会を重ねる、記念の年となります。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。最近では吉田則昭先生、加藤哲郎先生に相次いで研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第99回研究会】(12月26日(土)午後2時30分～5時30分)

年の瀬もおしつまりみなさまご多忙のところ多くの方にお運びいただきました。

- ・劉茜(早稲田大学大学院政治学研究科・外国人特別研修生)

「1920年代(1919～26年)の武漢における日本の宣伝工作」

この時期この地域における宣伝工作について、ほとんど現物資料のない困難な領域ながらどのような研究が可能なのか、考えさせられる報告でした。

- ・大竹瑞穂(名古屋大学大学院文学研究科・日本文化学専門・博士後期課程)

「アイヌの「仮面」をかぶる——映画『リラの花忘れじ』(1947年)に見るGHQの検閲と植民地喪失の経験」

占領期映画におけるアイヌ表象とそれに対するCCD、CIEの指導、奨励、検閲について報告していただきました。

- ・コンペル・ラドミール(長崎大学多文化社会学部)

「占領軍の情報は政策にどのようにいかされたのか 一戦後初期の安定化を中心に」

太平洋陸軍における戦史編纂及び検閲・宣伝活動に注目し、占領初期における治安の不安定材料についての占領軍の調査(憲法改正、復員、引揚等)の実態と占領政策の再編の相関について分析、考察されました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●2016年1月30日に開催された第100回の20世紀メディア研究会については追ってご報告いたします。次回の20世紀メディア研究会は、3月26日(土)で、西野厚志氏、宮杉浩泰氏、金子彩里香氏のご報告の予定です。その後は、4月30日(土)、6月4日(土)、7月2日(土)に20世紀メディア研究会を予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

岩本憲児編『日本映画の海外進出 文化戦略の歴史』(森話社)は、フランスで初めて公開された日本映画からグローバリゼーションの時代のインディペンデント映画まで扱うが、中でも、「ハワイ・マレー沖海戦」のドイツにおける受容(ハラルト・ザーロモン論文)や、国際文化振興会と日本映画(古賀太論文)、満州における日本映画の進出と映画館の変容(アンニ論文)、占領下の華北における日本映画と映画館(張新民論文)、冷戦期アメリカが見た日本映画(マイケル・バスケット論文)など、戦前戦時下、冷戦下の研究が興味深い。

【コラム：20世紀メディア研究会100回記念イヤー】

はじめて20世紀メディア研究所の研究会に足を運んだのは、『岡田桑三 映像の世紀-グ

ラフィズム・プロパガンダ・科学映画』（原田健一と共著、平凡社、2002年）執筆のための調査研究を行っている頃だった。岡田桑三（1903-1983）は、「山内光」の芸名で知られ、モダニズムのメンズマガジン『新青年』や写真誌、映画誌にエッセイを寄せる知性派の二枚目映画俳優としての表の顔と、プロキノシンパでありつつ、ソ連通であることを買われて東方社理事長として文化宣伝、プロパガンダの媒体『FRONT』を制作するという情報戦の担い手としての顔を持ち、戦後は昭和天皇の生物学者イメージの流布に一役買い、やがて東京シネマを創業し科学映画プロデューサーとして国際的な受賞を重ねることになった人物である。風通しが良く、学閥や専門にこだわらずに学び、教示と助言を受けることのできる学際的かつ国際的な20世紀メディア研究所の活動のおかげで、研究生活が充実したものになり、すべての関係者のみなさまに感謝申し上げたい。今年は研究会も回を重ねて100回目の記念の年を迎えた。情報・諜報、プロパガンダ、検閲研究が、今、ひとときわ生々しく、必要とされる時代を迎えている。

[2月11日付 文責：川崎賢子]